

会員だより

近くの旅姫路に新発見

関西の食の味は

薄口醤油で育まれる」

東京から来る長女一家との恒例の夏旅行が出遅れてまもなく、東西双方からネットで探しまくった。

結果的に近場が見つかり、改めてネットの便利さに感謝した。行先は姫路方面である。まずはJR姫路から姫新線に乗り換えて、本竜野に行った。『ガシマル薄口醤油』、赤とんぼの街」とも碑(いしづみ)の街」とも称される所である。

早朝に高槻を出て、工場に着いたのが9時半、案内役の社員さんが早く自社製品の良さを伝えたいかのように、今か今かと待ち構えてくださった。



赤穂の塩

瀬戸内海の塩と播磨平野の大豆

小麦と米から作った甘酒、すべて地元の農家とともに育てた材料と揖保川の伏



流水を合
を合
わせ
て作
った
ご自
慢の
醤油
だそ

うだ。孫が夏休みの宿題にすると聞いたのが良かった。かな。自社製品愛、郷土愛、たつぷりの社員さんに感謝して、工場からガシマル醤油資料館に回った。パンフレット代10円、入場料無料で、これまた昔かたぎな醤油屋さんだ。すっかり関東人になつた娘の台所に薄口醤油がないのが、私にとつて不満だったが、これから常備すると言う。

赤とんぼの歌はどなたも口ずさんだ事のある童謡である。その作詞をしたのがこの街出身、明治22年生まれ、三木露風である。33才の時、北海道トラピスト台地で望郷の念と「歳で離別した母への恋する思いをよんだ詩と言われている。露風の赤とんぼの歌詞の碑をはじめ、文教に優れた城下町であつたか、嗚呼玉杯に花うけて...」を作詞した矢野勘治もこの地の出身。他にも優れた文人多く、江

戸時代に訪れた井原西鶴や有名な俳人などの詩歌・俳句碑が街中、あちこちに見かけられるのが「碑の街」と言われる由縁である。姫路市内に戻り、市中のホテルに泊まる。

記・写真・上村サト子

私のすみかを探しと 転居騒動記(1/2)

エレベーターのな
いマンショ
ンで3階
までの階
段の昇り
降りが苦
痛になっ
てきました。



今は昇り降りが出来ないことは無いのですが、これからよくなることは考えにくいので、思い切つて高齢者住宅に入ることにしました。

弟妹たちに「自分が元氣なうちに、自分の気に入るところを探して決めた方がいい」という助言もあつて施設探しから始めました。

いろんなパンフレットの中から、私の希望の第一条件は交通が便利なこと、弟妹たちの近くであること。ある程度の広さがほしい。

足に自信がないのに、出かけることが好きな私は、今までの住所が大変交通の便利な場所だったので、それが第一でした。

それから高齢者住宅といつてもあまり「老人、老人」でないところが望みでした。今、高齢者向けの施設はたくさんあります。4、5ヶ所見学し、大抵のところは体験入居が出来るので、2か所体験入居しました。

見学した中では、食堂でみなさんに挨拶しても誰も返事をしてくれない(関心が無い)とか、部屋にお風呂がないとか、狭すぎるとか、交通の便がよくても二の足を踏んでしまうことが多かったのです。

その中で私がいと思ったのは、体験入居したとき、施設の人が今、お茶の時間ですが行つて見ますか」と声をかけてくださったので行ってみました。



広い部屋にテーブルがたくさんあつて20人くらいの方がコーヒーや紅茶などを飲みながら楽しそうに談笑しておられました。

老人会の集まりのようでした。私は一遍で気に入ってしまった。ただ難を言えば部屋が狭いことです。

25平方メートル以上と言うのが決まりだそうで、費用を考えなければもつと広いところはあるでしょうけど、年金暮らしの私には及びもつきません。

第3の条件は、涙をのみました。お話を伺うと月に10回ほどレクリエーションと言う名で行事があります。3日に1回くらいあることになりました。

その月には、カラオケ、歌留多取り、フラワーアレンジメント、などが目に付きました。古い老人施設という私の偏見は払拭されました。ここに決めようと思えました。

そうして7月、種々の手続きを経て入居することが出来ました。

しかしそれまでの始末は、今思い返してもゾッとするほど大変でした。30数年間、溜め込んだものものものが、3DKの部屋に呆れるほ

どあるのです。

初めは私もそれほどのことではないと、高をくくつていました。整理しだしてみると、出るわ出るわ切りのないほどいろんなものが出てくるのです。自分では「終活」と称して身の回りのものをボツボツ整理していたつもりなのですが、そんなこと九牛の一毛とでもいうものでした。何しろ25平方メートルですから、入るものは僅かです。



どうか悩んでいると、見かねたVG槻輪の会の会長さんが会員のかたに声をかけてくださり、5、6名の方が、3日も4日も暑い中をお手伝いしてくださいました。

お手伝いなんていうものもなく、私は見ているだけで、凄量のものを片付けてくださいました。そのお助けがなかったら、私は今、こうしてのんびりと暮らしている訳にはいかなかったと思います。ほんとに一生忘れな

います。感謝で一杯です。ありがとうございます。

記 牧戸 富美子